

□ 作曲

石塚潤一

2018年の創作には幾つか明るい話題があった。まず2月16日、1981年生まれ坂田直樹が尾高賞を受賞したとの知らせ。尾高賞は、NHK交響楽団が贈賞する歴史ある賞で、受賞曲である《組み合わされた風景》は、前年の武満徹作曲賞（審査員はハインツ・ホリガー）での第1位受賞作品。近年、ベテランの論功行賞的な受賞が目立っていたこの賞が、若手の登竜門である武満賞の受賞曲に贈賞されたことは、新鮮な驚きをもって迎えられた。なお坂田は、この《組み合わされた風景》で芥川作曲賞をも受賞し（8月26日）、武満賞、尾高賞、芥川賞と、いわば「三冠」を達成することにもなった。

新しい試みも始まった。NHKのFM番組「現代の音楽」は、20代から30代の若手・中堅作曲家3人に管弦楽曲を委嘱した。これらは、高岡健指揮の東京フィルの演奏で収録され、3月4日：辻田絢菜《Collectionism XI/Sidhe for orchestra》、11日：網守将平《Attack on Listening》、18日：小出稚子《南の雨に耽る》と、同番組内で放送初演された。今日、新作の委嘱を確実にしているオーケストラは、N響（年一度、Music Tomorrowの中で披露されるのが慣例で、昨年は6月26日に鈴木純明《リュウベックのためのインヴェンションIII「夏」》が初演されている）とコンポーザー・イン・レジデンスを置く名古屋フィル（2017年4月より酒井健治）など僅かで、若手・中堅については、室内楽作品発表を中心に優れた活動を行っている。オーケストラ団体からの委嘱が行われる状況にはない。まさに干天の慈雨がごとく試みであり、昨年限りに終わらせず、永く継続することが期待される。

11月の、一柳恵の文化勲章受章も明るいニュースといえよう。いうまでもなく、文化勲章は我が国の学術・芸術における最高の栄誉の一つであり、過去400名ほどの受章者を数えるが、クラシック音楽関係の受章者は、山田耕作、朝比奈隆、小澤征爾、吉田和の4名のみ。クラシック畑の作曲家としては、山田耕作以来2人目という快挙となる。加えて、一柳は誰もが知る国民歌曲の作曲家ではなく、国民的映画の音楽担当者でもない。1950年代末のアメリカでジョン・ケージの薫陶をうけ、帰国後、音楽における不確定性を推進した前衛作曲家であった。こうした前衛的な活動で知られた一柳の受章は、西洋音楽受容の突端に立っての創作を、重要な芸術活動として評価する機運が高まったが故であり、日本の音楽受容がどうにか一定の成熟を迎えたことの証左ともいえよう。

一方であまり良くない話題もあった。3月6日の毎日新聞東京版夕刊に「日本音楽コンクール作曲部門を大改革 純粋な譜面審査に」との梅津時比古による署名記事が掲載された。日本音楽コンクールは、毎日新聞社とNHKが主催する、我が国を代表するクラシック音楽コンクールである。その作曲部門が選考方法を変更し、従来、譜面を検討しての一次審査、二次審査を経て、本選として公開での演奏審査を行っていたものを、この演奏審査を取りやめ、譜面審査のみで順位を決定するというのが「改革」の骨子である（一切の演奏が無くなるわけではなく、1位入賞作品は受賞者演奏会で披露され、2、3位作品はスタジオ収録の上NHKで放送されるという）。上記記事によれば、まず「事例1 本選の演奏において、譜面通りに演奏されないことが起こり得る」「事例2 譜面審査の点数と、演奏を聴いての点数に開きが出る場合がある」ことが憂慮され、譜面

審査のみにすればこれらを無くすることができる、という。事例1は「審査員は本選の審査でも譜面を見ており、たとえ間違っても演奏されても、基本的にはそれが評価に影響することはない。しかし、会場の聴衆には間違った音が伝わることになるし、作曲家としては、不完全な演奏で審査されることに不満が生じる」と続くが、少し考えてみて頂ければわかるように、評価に影響しないのであればコンクール実施上の問題は全くないはずであるし、作曲家の立場としても、不完全な演奏で審査される不満より、とにかく作品を演奏してもらいたい世に出たいという希望の方が大きいであろうことは、一顧だにされていない。若き日の吉松隆は、自らの作品が音になったところをとにかく聴きたいがために、当時の楽壇の主流から離れていたにも関わらず、自作をコンクールに応募し続けていた（ちなみに、吉松の本コンクールでの成績は、1975年の入選が最高である）。こうしたケースは現在でもあるし、NHK FMからの委嘱の件で名前を挙げた辻田絢菜のように、本コンクールでは入選に留まった作品が1位2位作品を差し置く形で芥川作曲賞にノミネートされ、別の場での評価に繋がったケースもある。

よって、このステートメント（上記の記事は、梅津時比古の個人的見解ではなく、日本音楽コンクールとしての公式見解であることが後に明らかとなっている）は欺瞞的という他なく、作曲家のみならず、現代音楽演奏の一線に立つ演奏家からも激しい非難を浴びることとなった。1930年以降の歴史をもつ、日本を代表する作曲家団体の一つ：日本現代音楽協会は、会長の近藤譲の名前で「日本音楽コンクール作曲部門の審査会に係る変更についての要望と質問」を、5月5日付でコンクール委員会に送付。この中で上記記事に丁寧な反駁を行いつつ、記事中に付記されている経費削減こそが「改革」の本質と推察。その上で、以下のような質問を投げかけている。

(1) 経費削減が不可欠である理由を、主催機関担当部署からの貴委員会への経費削減要請理由説明と、それに対する貴委員会のお考えを含めて、お示しください。

(2) 経費削減が不可欠であるとして、その場合、特に作曲部門に対して他の部門に比して大幅な経費削減が実施されるのはどうしてでしょうか。経費削減が急務であるのなら、他部門もその負担を分かち合うべきですが、作曲部門のみに突出した経費削減施策がとられているようです。もし、これまで、他の部門よりも作曲部門に大きな経費がかかっていたのだとすれば、それは、作曲コンクールの意義と使命を適切に遂行するためにはそうした費用が必要であるということであって、それを削減してしまえば、コンクール作曲部門の基本的な教育的意義が脅かされる結果になります。コンクール作曲部門の意義を犠牲にしてまで、そこに突出した経費削減が課せられるとすれば、それは作曲というものへの軽視であり、差別に外なりません。

日本音楽コンクール運営委員会は、この問いかけに対して事実上のゼロ解答を続けており、これは日本の冠たるクラシック音楽コンクールの運営母体が取るべき態度とは到底いえず、関係各位には猛省の上、真摯な対応を促したい。作曲とは、日本人がクラシック音楽の歴史とアクチュアルに関わっていくための欠くべからざる行為であり、これを軽視するならば、日本人によるクラシック演奏は、所詮根無し草でしかないのである。

また、2018年は多くの作曲家の訃報に接した年でもあった。1月8日の、未だ50代だった藤井喬梓に始まり、4月30日には映画音楽の木下忠司と吹奏楽等で知られる東海林修が、8月20日に末吉保雄、9月16日に松下功、10月12日に小杉武久、11月29日に川崎優、12月3日に大中恩が逝去した。また海外からも、グレン・ブランカ、ディーター・シュネーベル、ポー・ニルソン、オリヴァー・ナッセンの訃報が届いた。